

成蹊會誌

第七號

欲

丹羽孝三

「いらぬい」の一點張なのです。何と云う馬鹿でしょう。私は腹が立つてくたさげなくなりました。犬だつて狼だつて教へられた藝當位はやるのに、十にもなつていないが、これくらいのことを忘れるとは……ねえ旦那さうでしょう……。こゝろに自分の腹におさまらなからしい虫を吐き出す様に(勿論大阪辯で)しゃべりつづけてもう一度窓外の景色を楽しんでいる自分の無欲な子供にさも憎らげな目を移しました。

敗戦後の或る夏の暑い日の晝さかり私は東海道線の車中で女の人のとなりで旅中の眠りをさまたされた。

三十五、六の商家の主婦らしい當時としては相當の身なりの婦人が自分の子供であるう、つれてくる男の子(小學二、三年位)を聞くに耐えない言葉で罵つていたのである。

「犬にも狼にも劣る奴」だとまでのはげしさである。然し子供は涼しい顔をして窓外の景色を楽しんでいる。餘りのことに私は婦人に言葉をかけた。すると『まあ旦那!聞いて下さい。私はこの近江八幡の驛から三十分程のところの村の出でして今は大阪へ嫁いでおり實家は母へ弟夫婦が百姓をやつております。私にはこの子を頭に三人の子供があります。御多分に洩れず米が足りませんので時々貰いに來るのです。が始めのうちは快く呉れた母や弟がこの頃では段々欲張つて來て、呉れるのを齧る様な態度が見えて來たのです。米が本當にないのなら私も無理とは思いませんが、供出しては尙ほ充分に餘つて間に流しているのを知っているのです。それなのに實の娘であり實の姉である私に出しおしめをするのです。本當に母子でも水臭いものですね。私だつて貰いに來たくはありま

せんけれど大阪では仲々まきびしくて手に入らないのです。手に入つてもとても高くてやりきれませんので、仕方なしに厭な思をしながら行くのです。ところが私に物おしめをする母も孫には目がないのです。これ(男の子を差して)には何でも呉れるし、行くことも喜ぶのです。そこで私はこの子に二、三日前から、おばあさんのところへ行つたら「おれが欲しい」「これも下さい」とおばあさんを喜ばす口上と一緒に色々の台詞を仕込んで來たのです。家で稽古をした時には仲々旨くやつたのです。今日行くことをあらかじめ知らせ、おばあさんを喜ばせておくことも忘れませんでした。孫が來ると云うので大變な御馳走をして待つていてくれました。大阪では仲々腹一杯いただく、云う様なことは難しいことですから、私は御馳走を充分にいただいたのです。子供もすっかり満足してしまいました。

私には返事のしようがなく失笑する外はありませんでした。自分の母や弟の欲張りはよくわかるこの主婦も自分自らの欲張るみにくい姿を寫す鏡は持つていない様です。欲ばるものにはやりたくない、欲ばらない孫には與えたい。欲ばるものは亡び捧げるものだけ残る……と云つた人があります。今度の戦争——否今度だけと限つたわけではないのです。欲張つた日本は亡びたのです。欲張らなかつたならどうなつたでしょうか?……勿論今度は日本が亡びたのですが今後も欲張る國は其の欲の爲めに亡びて行くこととしようけれど……。

然し「欲ばらなければ生きて行けないではないか」と抗辯される聲をよく聞きます。幸福に生きることを欲張つて生きることは相容れないのが事實の様です(世界の現實にごまかずに目を向け見たら直ぐ判ると思います)まず自分自身を其の執れ(これを我執と云つております)から解き放ち得ないで他の者を解放してやろうとしても無理なことではないでしょうか?この解放して今叫ばれている一切の解放運動を成就する本をなすものではないでしょうか。根を切らずにおいてはいつまでもたつても迷の繩から身を解くこと

は出來ないでしょう。この執れから解き放されて始めて本然の物の姿(これを眞理と云うのでしょうか)が見えるのではないのでしょうか。物欲!名譽欲!權勢欲!「欲に目が眩む」とよく云はれます。目が眩んで本當のところは判らないのがあたりまえでしょう。この迷いの作る天地の外に眞の天地のあることを見る(これをコペルニクスの轉廻などとしゃれた云い方をして)青年を喜ばせる人もありません。心が裸癡念、縮入癡念、寒中の水浴、斷食などを教育に取り入れた成蹊の創始者の狙もまず衣食住と云う目に見える執着から始めてもろく、の我執からの解放であつたのではないのでしょうか!「火も亦涼し」と云う公案もまけおしみではない境地である様に思はれます。(成蹊學園常務理事、専門三回卒)

創立當時を顧りて

廣澤俊夫

私は明治四十四年板橋の小學校を卒業すると目白中學へ入學した。板橋から四人通つて居た。片道一里半あつて定期(省線)で通う者、自轉車で通う者の中に私は徒歩だつた。其の年の暮に叔母が今度池袋に月謝の要らぬ學校が出來ると新聞で見た儘を傳へて來た。

岩崎小彌太男、今村繁三兩氏と中村先生は同窓の仲よし三人であり、三人で一生の仕事として世の中に残す仕事を教育事業と定め新教育家中村君二先生に兩氏が財政的バックを

されたのが内容であつた事を卒業後程經て知つたのである。學校の敷地は池袋驛西手の線路脇から西へ一丁距だつた地點で南北六十間、東西百間で四隅に木標が立てられ「成蹊實務學校用地」と墨痕鮮かに標るされた。

今思うと中村先生の直筆であつた事と思はれる。毎日其の脇を通つて目白に通學往復するのだから其の變化は直ぐ判かる。木標の間に木柵が施こされて南は運動場、東から西へ教室を採つた校舎が築かれて行つた

そして其の西に岩崎邸にあつた圖書館を選されて改築したという中村先生の御宅がたつた。

此の頃私は入學規則を頂きに這入つた。

今度の入試は一年と二年とで二十五名宛探るが、私は二年を受けよとの事であつた。試験は六ヶ敷くて殊に算術の四則問題には自信が無かつた。試験の結果が郵送されて来た。二年には駄目だが一年に入れてあげるといふ事なのだ。受験總勢六五〇人から二年二十人、一年二十五人を探つたとの話を後で聞いた。斯くして私は一年生に就いて戴いた。

處が大正の突發だ。一丁距たて北隣りの豊島師範の大校舎 夜半失火炎上其の南半分を焼き北の強風は風下の吾校舎、中村邸共々嘗め盡して翌朝迄に灰塵に歸して仕舞つた。飛んで學校へ行つた。

中村先生は假校舎が直ぐ建つ。豫定通り授業を開始する。本校舎の再建も元の通りに日ならず完成其處へ移るだらうから心配するなと落着いて語られた。

假校舎というのは元の處へ再建する新校舎の建築に邪魔にならぬ南へ出た處へ建てられたが一棟二教室天井なしのトタン屋根で、朝の間は雨の足音が耳ざわりになり、又強い雨が來ると雨の音で講義が聞きとれないで雨渡りもする状態だつた。しかし毎日愉快な勉強が出来た。そして歴史等は此の一棟二教室で一、二年合併授業で行なはれた。

私は二學期から二年級に編入された。私を進級といつた。是で第一回の卒業生となり得たのだ。

七月再築完成の新校舎に移つた。北側中央に校門、直ぐ校舎で、這入ると校長室と職員室があつて東に五教室西に二教室、校舎外南側は運動場、西南の畑地一帯は園藝實習地で

生徒一人當り一坪の畑を持ち運動場の南側東西に菊畑を作り木柵にコスモスを植えて秋に備えた。假校舎は西北の隅に移されて講堂の出来る迄擬念法の道場となり、後には木工場となつた。

此の夏明治大帝の諒閣あり改元大正元年となつた。帽子の徽章は成蹊の成の字を葉の付いた桃の實の上に乗せた中村先生御考案のものであつた。是が御幣に見えたと思つて學校に對して誰云うとなく御幣の學校と近所の人は言うて居たものだ。もうこんな徽章を残し持つて居るものはないと思つて懐しい氣がする。

當時岡田式静座法というのがあつた。大體是を元として進歩せしめたのが中村式擬念法とも云うべきもので職員生徒一同毎日三十分行つた。實務の一、二年生は初め假校舎でやり、後に講堂が新築されてからは講堂でやつた。先生方は演壇で吾々は疊敷廣間に座つた。始まりと終りの合圖はお寺の本堂で和尚の鳴らす鐘の音であつた。炎夏は十二時半から一時迄綿入れを着て座つた。すると午後が何だか暑くない氣持で過す事が出来た。

冬は朝裸體でやつた。綿入れを着て居て寒い冬の裸體とはと思つてやつて見ると何でもないばかりか終日暖かく暮らせるのだつた。此の修養というのは「やつてやれぬ事は無い」といふ處を身を以つて體驗せしむる中村先生の生きた教育法の大切な部分を占める處のものであつた。

此の頃學校には毎日の様に參觀の方が見えになつた。澁澤榮一、高木顯寛、八尋提督、金原明善翁の諸名士を初め中村先生の新教育に注目されて居られる方々で、中村先生は御自身校舎から園藝實習地迄、御客を御案内しながら説明をされて行くという御熱心振り、又生徒は此の方々と行き會つた時は尊敬の目なきでオジギをする事になつて居つたので吾々は文句なしに實行した。

處が參觀に來られた方々としては非常に感じを良くせられて「實に感じの良い學校だ」と他所で洩らされた由を一再ならず聞いた。畦脇を添う様に流れる溝の様な流れの途中に池かなと思はれる水溜りのあつたのを皆で浚渫して見た處、いくらカイボツても泥土は盡きず、濁水が貯まるばかりなのを尙一層の努力を傾けてヤツト出来た時には三間と六間、深さ一丈という大きな池と之間、深さ二丈という大きな池と之間、たので周圍に土崩れを防ぐ爲の杭と竹をはめ込んでから自然水も透む様になつた。

夏の水浴ばかりでなく寒中水泳も此處で行はれたのは勿論である。今あつたとしても浅い池になつて居る事だらう。

校舎の東が池袋驛、南へ目をやると鬼子母神の森から日白の森、西は狐塚の雑木林の上の邊りから秩父の連山の峯が流がれ日によつて近くで見ると印象的な富士山が秋は藍に冬は白妙に見えるのが校舎の武蔵野に占める地位だつた。

校舎は今も鐵道教習所として残つて居るそうだがモウ此の眺めはない筈だ。そして此の間も行つて見ると池袋が大東京の裏玄關に發展途上とか西武デパートの新築、大銀行の支店の停容等、土地によるが四十年で池袋の變化も大したものだ。

小林一郎先生銀時計組の先生は文章にも講演にも一頭地を抜いて居られて講義を生徒一同が喜び楽しんで居る事は誰も忘れなれない處だ。先生の傑作といふ心の力(心力歌)の折疊式の本が出来て、毎日擬念法の時に誦じ此の詳細の解釋を内野台嶺先生によつて聞かせて戴いた。

遺澤恒猪先生は中村先生の中學時代

の先生で此の御縁で成蹊に招じられた先生だが數學と英語の擔當で笑顔で同じ調子の教授振りが特長だつた津田英學塾を出たばかりという英會話の多賀先生は、二十才位だつたと思うがまるで姉さんに教わつて居るようだつた。會津辯の繪の相田先生に是が御自分の快心の作といふのを見せ頂いたが誰もそうと分るものは一人も居なかつた。算盤の高井先生は如何なる競技會でもナンバーワンであつたという方で、教授方法も新しい世代の實務に即した新式のものであり、卒業生は皆社會に出てから實務などどんな先生を有難く思つたか忘れなれない先生である。

園藝の先生に村松先生という方があつた。小粒の先生でまるで兄さんと一緒に鋏を持つて畑仕事の指導を受けた。

私は大正二年から同六年まで成蹊に學びました。従つて成蹊實務學校が池袋につくられて間もなくの頃で、大正三年には成蹊中學校が創立されたのでした。その頃の中村春二先生の新教育を目ざしての旺んたる御意氣と御活躍を憶うにつけて、その成果として現われている今日の成蹊學園の盛大さをおい合せまして感慨無量のものがあります。殊に近く四十周年の式典が行われるとのこと尙更感を深くするものであります。

私は只今國立大學の一隅に職を奉じて、戦後切換えられた新制大學の新しい制度の上の教育の熟成につとめて居ります。扱つて少し話ばかりですが、一九二七年に Karlsruhe という人が二つの植物の間の安定な

受ける氣持であつた。通譯として出征されシンガポールで戦死されたと聞いた時はお氣の毒でならなかつた教壇には立たれなかつたが中村小波先生が校務、殊に會計事務を執つて校長先生をお助けになつて居られた事は記憶から去らない事の一つである。

四十年前の「創立當時を顧みて」という題下には同時入學の實務第一回、第二回卒業生の一、二年生時代の記憶を書く事で書く者も限られた數しか無いと思はれる儘に私は私なりの思い出を恥を忍んで述べたが、扱つて難然とした此の拙稿雜記の内に多少でも創立當時が思い出せる事もあるならば望外の幸甚である。

(帝國證券取締役社長 實務一回卒)

その植物の一つは Raphanus 屬のもの、即ちダイコンの一種、他の植物は Brassica 屬のもの、即ちカンラン、ナッパの一種でありました。これから出来た雜種には Raphano-Brassica という名が與えられました。

扱つてこの種子を播くとすくすくと成長し、葉も伸び、根も出来たのでしたが、さてこの雜種の姿はどんなものだったでしょうか。

その葉は大根の葉、その根はナッパの根でありました。私は新制大學がこの様に特長を失つてラファノ・ブラシカの如きものになつたら大變だといつも憂えて居るものであります。

國立大學というものは大きな組織

ラファノブラシカ

妻木徳一

ラファノブラシカ

妻木徳一

ラファノブラシカ

妻木徳一

ラファノブラシカ

妻木徳一

ラファノブラシカ

妻木徳一

の中にめり、いわば私共はそのワクにはまっています人間であります。この様な中に位置して居りまして、遠く中村先生の學園建設時代のことを偲びますと、先生は獨創と革新の中に烈々たる氣魄と信念を以て、文筆に、實踐に、縱横無盡に活躍されたのであります。そこにはワクがあるところか、古い教育のワクをはずして絢爛の布を織り出すことであります。

感想

同じ新教育といながら今日の新制大學の新教育には、どうしてか、やがやがないものか、とつくづく感じるのであります。結局それは氣魄がないのであります。當時少年たりし私共はたしかに先生の烈々たる氣魄に強くうたれたものであります。成蹊の教育が個性の伸長を一つの目標としたものであります。が、學園そのものの特長の伸展も亦當然期待されるべきであります。

今日の成蹊がラフアノ、ブラシカになり終る等ということは考えられません。桃李、花がいつまでも香りつづけることを祈つてやみません。

(九州大學教養部長、
理博、中學一回卒)

高橋 淡

桂離宮を拜見したことがある。小堀遠州の作と稱され、邸園の結構、泉石の位置、其の林泉の美は、世に喧傳される丈にあつて斯道の門外漢である私共にも去り難く美しくあつた。

れ、果ては三菱の學習院など、悪口が如何に誤り傳へられるかを痛感されるのである。

中村先生は教祖的存在ではなかつた。一介の居士、一個の阿羅漢として、自身が強烈な求道者であり、修行者であつて、單なるワンマン的指導者ではなかつた。

驛長に非ずして機關士であつた。或場合には機關手であり又火夫であつた。そしてそれを平然としてやられた。

仙台と成蹊と

千葉 明

る批評も行はれたことであり、事實吾々と一種の實驗動物たりしことも力と熱誠に對しては、この實行せざるを得ないのである。

中村先生が新教育を實行に移されるや實に自身一切をあげてぶつかつて行かれた。

年令三十才を僅かに超えた時である。云はゞ新婚早々とも云うべき時に、富裕な父祖の傳承をすべて教育刷新の實行、實現の爲に犠牲とされたのである。中村夫人にもまた良き理解者であつて、いはゞ悲愴な大決心をされたことであらうと思ふ。

岩崎小彌太、今村繁三兩氏が育英のことに援助を惜しまれなかつたこと、中村先生に取つて鬼に金棒であり、語り傳へられべき友情美談である。

日本敗戦後財閥解體のことなどあり、勤め先きの轉變に際會して、些か死力を盡した心算であるが、これは外からの壓力に抵抗しれ止むを得ざる粉骨碎心であつて、内より發動して一切を放下するに比へては、太陽の前の螢の如き活動であつた。

唯、捨身懸命の氣合、境地と云うものを悟らせていたゞいたのは、多くの成蹊教育の賜物であり、中村先生の恩澤と思ふのである。

今日、想うことあまりに多く、語るに言足らざる、筆意を盡さず、或は反つて誤解される點があるかも知れないが、四十周年の式典には仕事の都合上どうしても參列出来ないの、簡筆乍ら感想を記して、旧友諸賢に御挨拶の代りとする次第である。

(泉不動産取締役、
實務二回卒)

ゴルフ會記

(洋画家、中學四回卒)

成蹊人のゴルフアが大部分多くなりましたので、相模のメンバーを中心に、去る七月二十六日午後、相模コースに於て、戦後、第一回の懇親試合を舉行しました。参加者一四名一八ホールスメダルの結果は栗林一二氏がネット七二の好成績で優勝、南部領雄氏、田山正男氏が夫々二位、三位を占められました。

當日が土曜日であつたので、ヴィジターの人数に制限があり、存じ乍らも案内致さなかつた方々にお詫び申し上げますと共に今後は、なるべく大勢の人が集れる様にして、申合せを致しましたから、世話人(佐藤泰止)迄、名乗りを上げていただき度く、御願ひ致します。

近い將來に、全日本の成蹊人ゴルフ選手権大會が催され、學園杯など争うならば、一層樂しがるかと夢みて居ります。

(佐藤泰止)

ところが案内の係員の話は月並な茶道の詫び、寂びばかり強調されて、如何にも創建の時から汚ならしくうす暗いものであつたようなことを云うのである。

遠州などは大名茶であつて、しみたれた宗匠茶ではないので、閑寂といはんよりも、華麗なものであつて、遠州を今日に在らしめば、コンクリート、ステンレス、ガラス、ビニール、ネオンライト、等々の新しい構造材料を自由に驅馳して、新らしい美を創作されたのではないかと思ふ。

成蹊の教育が會て——今日は知らず——宙に浮いた精神教育や、固苦らしいスパルタ教育などと誤解さ

吾々悪童共を鍛錬の對象として、私共に切磋琢磨されたのであつて、其の強烈な實行力が吾々を啓蒙し、感化されたものであつて。所謂成蹊教育の眞髓はこの邊にあつたのではないかと思ふ。

勿論學校創立日淺く、先生として、教育の手法が確立されたわけではなく、絶えず變化し、動搖し、發展しつつあつたがゆえに、後世いろいろ

池袋時代に園藝に久保田正彥といふ先生が居た。ドイツ語で寝ごとを云うという傳説があり登之話、馬の話、大木の話を雨の日は教室での園藝の時間だつた。先生の讀書表はソローの「森林生活」マテリリンクの「蜜蜂の生活」などと並んでアルプスの寫眞帳やセガンチネ、グレコなどの寫集もあつた。ホイットマンの研究も富田碎花譯の詩集の巻末に號數の違つた活字を組み合せた年表は特色があつた。先生は若い頃のことは多くは語られなかつたがその中に廣瀬川の上流に空が帯のように見上げられる谷があるとのことである。奥新川のあたりであるらしい。山形縣境に近い。卒業生の名簿を見ても東北大に學んだ人は相當あるよ

うだが、今の仙台は戦災後その仙台らしさは殆ど街には失はれた。市内どこでも泳ぐた廣瀬川も評定河原から下流は出来ない。護岸工事が行はれて長町込の姿はまるで變つた。大年寺の裏山の森も無い。あるのは大白山と七つ森、泉ヶ岳の遠望。私はそれでも好んで廣瀬川の流を寫している。曾宮先生が春の展覽會に何度か來られた時話したりして。美奈からこれをお話されたりして。美術史の村田潔、士、大學に三井生喜雄博士が居り鹽釜には谷井環君が居る。建築の小野薫博士も講座を持つて居られるらしい。

車門出の石附孝平氏は郊外愛子に農場を營まれて居る。滿洲で没した守隨一君がその「民間傳承」の時代

縣北の大嶋を研究對照にしたことがあつたがその成果はどうなつたであらう。

成蹊も四十年になつたという。地方の成蹊の根もしつかり張る譯である。

昭和二十七年年度 會費納入お願い

會費(名簿代共)

一般	年額	五〇〇圓
學生	年額	二〇〇圓

この外一口百円以上の寄附金を募集しておりますから御身分に應じて何卒御後援の程お願い致します。御送金は可く同封の振替用紙を御使用下さい。